

## 東方仁徳の愛するという事

今日は2019年12月2日。癸酉日。12月の生き様レジュメの締め切り日は、昨日の12月1日。。。今月も締め切りに間に合わない。なかなか、レジュメのアイディアが降りてこない。スタッフからの催促メールに怯えてしまう。すみません、あと1日待ってください。。。月末月初の恒例のやり取りとなる。職業は作家なのかと、自分の職業を疑ってしまう。今月も多分「今この瞬間を必死に生きよ！」と書くだろう。今この瞬間が大切なんだ、以上！！と言い切ってしまえば、どれだけ毎月が楽だろうかと、ふっとそんな逃げ道を考えてしまう。結局、毎月、帰着するところは同じなのだから、それでもいいじゃないかと、いつものスタバの席で悶絶する。アイディアが降りてくると数時間で書き上げてしまうので筆は早い方だが、なかなかアイディアが降りてこないのだ。。。玉堂星は文章創作能力を意味する。私は玉堂星を保有しているので、このスキームは玉堂星を開花させるプロセスの中に居る。玉堂星をお持ちの皆様も日記を書いたり、日々、SNSに文章を投稿する意識を持つと文章創作能力が異常に高まるのでトライしてみて欲しい。

さて、何の事例が今の皆様にとって、最も心に響くだろうかと思いを馳せてみる。塾生の皆様や弊社のスタッフの不安や恐れを垣間見ると、売上、評価、自我を律する事、愛し愛される事に集約するようだ。今月はその象徴である「愛する事」に関して記述してみよう。愛する事は十大主星では祿存・司祿で表現し、五行では土性が司る。様々な愛情があるが、今月は五德本能の東方仁徳から愛する事をテーマに考察してみよう。

1年目のカリキュラムで鍊金術を学ぶ。十大主星の祿存星で習得する。代償の先払いが鍊金術の基本であるという観点だ。『金無き者は愛を与える』と云う言葉も同時に学ぶ。お金や、与える物がない者は、物質的な物は「節約」しながらも、無形の愛や優しさを与えないといふ事だが、スマートプレゼントはここから繋がる。小さな金額を複数人に一挙に切る事で、悪因縁の浄化をする。浄化された清浄な存在の元に求心力が生まれ、結果的にお金愛情人脈チャンスを引き寄せるという概念だ。ここは多くの方が覚えているところだろう。祿存星は土性なので、この土性を更に稼働させるのが相生論である。木→火→土→金→水は互いにサポートし合い、一つ前の存在が一つ後の存在の勢いを隆盛させる。土性の勢いを活気づけてくれるのは、その一つ前の火性なので、土性に集約されるお金愛情人脈チャンスを、より稼働させなければ、火性が司る伝達本能をより意識する事で効果大となる。だから鍊金術の基本は節約する、与える、分かち合う事になる。与えるから与えられるという概念は理解し易いかもしない。与えて空白になったスペースに、新たなより良いものが循環し与えられてくるのだ。また相生論からの火→土で、分かち合うからこそ、富が動かされるという概念も理解し易いかもしない。富の象徴である土は火に依って生じられるという相生論そのものをイメージして頂ければ理解し易いはずだ。さて節約に関して。金無き者は愛を与える、から由来ている。最初は多くの者が底辺からスタートするので、物質的なものが揃っている事が少ない。だから与えることが出来ないという立場に立つのではなく、無形物質を与えられることは出来るだろうという観念から、物質的なわざかな物でも、節約して他者に与える意識が大切であるという理論に繋がる。薪を背負いながら本を読む姿の像で有名な、江戸時代後期の農政思想指導者であった二宮金次郎は、節約の大切さを次のように説いている。「貧富の違いは、分度を守るか失うかによる。(分度とは経済面での自分の実力を知り、それに応じて生活の限度を定めること)それにより貧となり富となる。偶然にあらず、富も依って来る処あり、貧も依って来る処あり。人皆、貨財は富者の処に集まると思へどもそうではない。節約なる処と、勉強する所に集まるなり。」北方智徳の勉強する事の大切さも説いているが、話がそれるので、ここでは触れないでおこう。

話題を元に戻そう。前述した通り、鍊金術の基本は節約し、代償の先払いと、まず与え、自分の想いを分かち合う事になる。相生論(木→火→土→金→水)から論じると鍊金術の基本はまず自立・自律し、その律した自分が想いを分かち合う事で、お金愛情人脈チャンスを引き寄せることが出来る様になり、その結果、社会的役割や影響力を担い、その責任感から更なる勉強の必要性を突き付けられ、物事の本質を

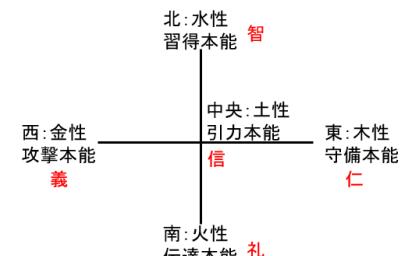
探究し道を極めていく。その道を極めた者が更なるオーラを發揮し、想いを分かち合う事で次元の違うお金愛情人脈チャンスを引き寄せ、更なる高みに登り、世の中の責任を担い、結果的に物事の本質を極めていくという循環をするというのが、この相生論の基本概念である。ここまで的内容は陰陽五行論塾説明会でも解説している通りだ。

今回はこの錬金術を、違う視点から紐解いてみよう。陰陽五行論には五徳本能という根本概念がある。仁義礼智信である。仁徳は東方で木性。義徳は西方で金性。礼徳は南方で火性。智徳は北方で水性。信徳は中央で土性を司る。五徳本能全てを動かして錬金術に繋げる方法と、仁徳と信徳だけをピックアップして錬金術に繋げる方法がある。今回は仁徳と信徳をピックアップした方法から考察してみよう。こちらの方がシンプルで簡単に実践でき易いからだ。

仁徳(東方:木性:守備本能)→愛情、仕事、学校、友人、仕事、対外的、社会

信徳(中央:土性:引力本能)→愛情、自分、お金、人脈、チャンス、魅力、訴求力、影響力

この学問は分類学なので、上記の通りに分類できる。ここで疑問に思うのが両者に愛情が配置されている事だ。当然、配置が違うので「愛情」という言葉に込めている意味も導き出した理論も違う。東方仁徳の愛情は五徳の仁徳の仁の愛情であり、信徳の愛情は引力本能から引き寄せられた愛情である。前者はより能動的であり、後者は受動的である。前者が一次的に与えていくのに対して、後者は二次的に結果的に引き寄せるという違いがある。前者と後者はそれぞれ木性と土性という立場を取る。これを相生相剋論から観ると木→土という木が土を剋す形になる。木は剋



す側に在るので禄存星と司禄星が生まれ、土は剋される側になるので車騎星と牽牛星が生まれる。この詳細は十大主星早見表を参照のこと。懸命に働いて名聲名声、権力影響力を得て、不特定多数から愛され、人脈、チャンス、売上を引き寄せてしまうこの組み合わせは、仕事や学校生活では欠かせない要素である。勉学が初期段階の頃は、剋戦は意味嫌いがちになるが、実はそうではない。剋戦があるからこそ、または剋戦の中にしか、禄存司禄、車騎牽牛は存在しないのだ。仕事や学校で成果を出していく上で不可な要素は、剋戦の中にしか存在しないのだ。だから剋戦を忌み嫌うと限界を超える在り方をしないので、結果的に禄存司禄、車騎牽牛が人生の中に発生しない在り方に通じ、お金人脈愛情チャンスと成果結果・権力影響力・高い評価を得ることが出来ないのだ。

さて剋す側の木性仁徳の愛情と、剋される側の土性信徳の愛情の違いに関して更に考察していこう。前述した通り、両者の愛情は違う理論から導き出して同レベルで表記しているので、混乱が起こり易いかも知れない。特に習得進歩が初期段階の場合、ほぼ混乱で終わってしまう可能性があるが、それで良しとして欲しい。何となく雰囲気で捉えていくのが、この学問の最大の特徴でもあるからだ。何故ならば、この学問は「人とは何ぞや」という究極のテーマを念頭に置いている。人を学理的に解読することなど、ほぼ不可能に近い。だから何となく雰囲気で捉えることが大切になるのだ。行間の空気感を読むことである。文字からのエネルギーを読むことである。それが人の本質を捉える練習の礎になる。空気感やエネルギーを無理やり学問的に体系立てたのが本学理である。だから理解しようとしたことだ。感じ取ろうとする事が大切なのだ。。。また話がそれてしまった。。。天報星と異常性が絡む特性だ。今日は癸酉日で癸巳と大半会となり、文章創作に異常性が絡む日だ。話を戻そう。。。二次的に発生する信徳土性の愛情はその場所そのものが禄存司禄であり、相剋論から論じると、木性から剋されるという刺激を受けないと稼働しない愛情である。つまり受身の愛情で在り、存在の魅力で引き寄せる愛情である。つまり魅力的になりたければ、木性から剋されない限り、魅力は身に付かないのだ。その意味でも剋戦を忌み嫌ってはいけないのだ。現実生活の嫌な人、嫌な仕事、嫌な事象から目を背けると存在力・魅力が稼働しないのだ。魅力的な存在がその場に在る全ての愛情(人脈、チャンス、お金)を引き寄せてしまい、魅力的な存在に一極集中するのだ。これが引力本能の二次的愛情の特性である。

これに対し、一次的に発生する仁徳木性の愛情は、仁そのものが、意味を成している。仁の意味は、

辞書を借りると次の通り記されている。仁とは中国思想における徳の一つ。最高の愛情。仁愛。とくに儒家によって強調されており、孔子がその中心にすえた倫理規定、人間関係の基本。主に「他人に対する親愛の情、優しさ」を意味する。孔子は「君子は仁者であるべき」と説いた。孟子性善説に立つ孟子は惻隱(そくいん)の心が仁の端(はじめ)であると説いた。これを四端説という。惻隱の心とは、同情心のことであり、赤ん坊が井戸に落ちようとしているとき、それを見た人が無意識に赤ん坊を助けようと思う心であると説いた。付加情報ではあるが、陰陽五行を体系立てた孟子による四端説の四端とは、惻隱(そくいん)、廉恥(れんち)、辞讓(じじょう)、是非(ぜひ)の4つの感情の総称である。孟子は、性善説の立場に立って人の性が善であることを説き、続けて仁・義・礼・智の四徳にリンクさせた。その説くところによれば、人間には誰でも四端(したん)の心が存在する。「四端」とは「四つの特徴」という意味で、それは、

「惻隱」(他者を見ていたたまれなく思う心:仁)

「羞惡」(不正や悪を憎み恥を知る心:義)

「辭讓」(譲ってへりくだる心:礼)

「是非」(何が本質かを見抜く心:智)

の4つの道徳感情である。この四端を努力して拡充することによって、それぞれが仁・義・礼・智という人間の4つの徳に到達するというのである。なお、孔子は、『論語』のなかで「仁」について明確な定義をおこなっておらず、相手によって、また質問に応じてさまざまに答えている。言い換えれば、儒家の立場においては「仁」とは人間にとて最も普遍的で包括的、根源的な愛を意味するものとして考えられてきた。日本の皇室も男子には仁を代々にわたって名前に用いられる字とすることが慣例となっている。

仁とは最高の愛の形であり、孟子の四端を借りれば、仁とは「他者を見て、いたたまれなく思う心」だそうだ。仁徳は他者の内面を見て、その心の悲哀、虚しさ、喜び、痛みを感じ取り、いたたまれなく思う心を動かすことになる。「他人に対する親愛の情、優しさ」と表現しても良い。孔子は「君子は仁者であるべき」と説いたのは前述した通りだ。東方仁徳は、かく在るべきと説いている。他者や社会に触れて、いたたまれなく思い、それに対する親愛の情、優しさを、皆様は馳せているだろうか。東方は仕事、学生で在れば学校になる。仕事で営業をしてはいけない、売上をあげてはいけない、人脈を作ってはいけない、と説いているのは、この理由からである。それらを得たければ東方木性(仕事)で仁徳という根を、中央土性(お金愛情人脈チャンス)という土に張る事で、結果的に求心力で木性の根から土性のお金愛情人脈チャンスを吸い上げていくもので、引き寄せていくものである。仁徳は東方なので守備本能。従って、他者を守る姿勢が仁徳の在り方となる。仁=慈しみなのである。

ここまでを整理すると、東方仁徳を稼働させると相剋論から中央信徳が稼働し、お金愛情人脈チャンスが発生する。その起因は仁を稼働させること。仁とは他者への慈しみ、他者に想いを馳せて、いたたまれなく思う心、他者を守る姿勢。これを仕事や学校生活の中で行う事で、生活が豊かになると説いている。多分、誰にでも出来る在り方であるが、仕事や学校生活の中では、主体的にはなかなかできない事もある。蹴落としたい、憎い、嫌だ、辛い、壊したい、逃げたいと云った感情は溢れてくるが、他者に想いを馳せて、いたたまれない気持ちになり、慈しみ、その存在を守ろうとする在り方を選択する事は、とても難しいのかもしれない。そんな在り方を意識するだけで、その存在は際立ってしまい、他者を惹き付けてやまなくなるだろう。東方仁徳の愛情は他者に想いを馳せて、いたたまれない気持ちになり、慈しみ、その存在を守ろうとする一次的愛情であり、中央信徳の愛情は結果的に、自らの存在の魅力、存在の大きさから、他者を勝手に愛されて止まない愛情を引き寄せる二次的愛情である。同じ愛情でも起因が違うのだ。

相生論の木火土金水を循環させる方法は王道であり、基本中の基本である。しかし自立・自律し想いを分かち合い土性が稼働するまで、人によっては時間が掛かるのも事実である。それに対して五徳本能の仁徳を意識する事で信徳を剋すエネルギーを稼働させる方法は、自分次第で如何様にもなる。基本の相生論の木火土金水を循環させる方法を選択した方が、長期的には効果的である。しかし、この基本をやってもなかなか現実に変化が出ない場合は、局所的な仁徳を稼働させる方法を選択してもいいかもしれません。

れない。他者や社会地域を自分から慈しんでいくことで、直接的に信徳を剋し稼働させ、お金愛情人脈チャンスを引き寄せるのだ。しかしこれは偏った方法であり、この方法を長年積み重ねるべきではない事も事実である。基本の相生論を循環させることに行き詰ったときの突破口を開く方法として、引き出しの一つとして知っておいた方が良いだろうという情報提供である。まず基本の相生論を循環させ、行き詰ったときに、偏りはある方法ではあるが、仁徳を単独で動かす事で人生に打開策を打ち出すのだ。

土性に集約するお金愛情人脈チャンスは、私たちの人生の潤滑油になってくれる。しかし、それは象徴的なものでしかなく、本当の幸せはそこにはないと、この学問は定義している。本当の幸せは、他者や社会のお役に立った時にしか永続しないと説いている。その意味においても、東方仁徳は他者や社会の位置であり、仁徳と云う慈しみを発揮する事が、本来の社会生活の基本であると捉えることが出来る。それを地で生きる者の元に、結果的に高い評価や知見、礼節、そして何より売上愛情人脈チャンスが一極集中する因果を知っておくべきである。如何に他者的心に寄り添い、いたたまれない気持ちで慈しんでいかが大切になる。これをビジネスでも学校でも家庭でも実践せよと説いているのだ。心がこもっていないなくてもいいから、形だけでも綺麗な慈しみの言動を心掛けた方が賢明である。ありがとう、ごめんなさい、愛している。どんな言葉と態度で他者を慈しめば、その本意が伝わるだろうか。2019年2月のレジュメで己亥年の動向を解説した。早いもので、もう10ヶ月が過ぎた。みなさん的人生に何か肯定的な変化は起きただろうか。2019年のレジュメの最終章では諸行無常を説いた。その最終章を少しだけ、振り返ってみよう。

詩人の高見順は56歳で食道癌と診断された後、「電車の窓の外は」という詩に、こんな一節を書いている。「電車の窓の外は 光にみち いきいきといきづいている この世と もうお別れかと思うと 見なれた景色が 急に新鮮に見えてきた」死を受容するしかない立場になって初めて、彼は見なれた景色の一瞬一瞬に永遠の＜輝き＞を感じ、それを「新鮮」という言葉で表現したのではないか。生きた花こそ美しいと感じるあの感覚に通じるものがある。また黒澤明監督の映画『生きる』は、この無常観の美しさを、そしてこの一瞬を生きることの大切さを伝えている。主人公は市役所に勤務するパツとしない公務員で、毎日書類に判を押すだけの無気力な生活を送っていた。ある日、胃癌で余命いくばくもない事を知らされ落ち込むが、今、自分がやるべきことに目覚め、最後は住民の念願だった公園作りに奔走し、ついに完成させる。死と直面して初めて真に生き事が出来るという姿が描写されている。この様に限りがあるからこそ、今を充実させられるという原則を知っておくことである。生あるものはいつか必ず滅びる。花の美しさは、ずっと続かない。無常だからこそ、死があるからこそ、人は美しいと感じるのである。諸行無常であり、全ては移ろいゆく死すべき存在であるからこそ、「今という瞬間」を無駄にしてはいけないのだ。逆説的に表現すると死と向き合う事が生を豊かにさせる生き方に繋がる。黒澤明監督の『生きる』は、まさに死と向かい合う事が生を豊かにすると訴えている。

最後にアメリカ人の女性が、10歳の息子を亡くし、その悲しみの思いを綴った詩を紹介する。

「最後だとわかっていたなら」 ノーマ・コーネット・マレック著

あなたが眠りにつくのを見るのが 最後だとわかっていたら  
私はもっとちゃんとカバーをかけて 神様にその魂を守って下さるように祈っただろう

あなたがドアを出て行くのを見るのが 最後だとわかっていたら  
私はあなたを抱きしめて キスをして そしてまたもう一度呼び寄せて 抱きしめただろう

あなたの喜びに満ちた声を聞くのが 最後だとわかっていたら  
私はその一部始終をビデオにとって 毎日繰り返し見ただろう

あなたは言わなくても 分かっていたかもしれないけれど  
最後だとわかっていたなら 一言だけでもいい 「あなたを愛してる」と私は伝えただろう

たしかにいつも明日はやってくる でも もし それが私の勘違いで  
今日で全てが終わるのだとしたら 私は今日 どんなに あなたを愛しているか 伝えたい

そして 私たちは 忘れないようにしたい

若い人にも 年老いた人にも 明日は誰にも約束されていないという事を  
愛する人を抱きしめられるのは 今日が最後になるかもしれない事を

明日が来るのを待っているなら 今日でもいいはず  
もし明日が来ないとしたら あなたは今日を後悔するだろうから

微笑みや 抱擁や キスをするための ほんのちょっとの時間を どうして惜しんだのかと  
忙しさを理由に その人の最後の願いとなってしまったことを  
どうして してあげられなかつたのかと

だから 今日 あなたの大切な人たちを しっかりと抱きしめよう  
そして その人を愛していること いつでも いつまでも 大切な存在だという事を  
そっと伝えよう

「ごめんね」や「許してね」や「ありがとう」や「気にしないで」を 伝える時を持とう  
そうすれば もし明日が来ないとしても あなたは今日を後悔しないだろうから

今月は東方仁徳の愛するという事をテーマに人生を紐解いた。毎年、年末の宿題としているが、まずは身近な存在から愛していく事である。親しき中にも礼儀あり。近しい存在で在るからこそ、甘えが出てしまい、言動が乱れてしまう。後悔するその前に、ありがとう、ごめんね、愛していると伝える方が賢明である。どうか心からの「ありがとう」と「愛している」をお伝えになって伝えてきて欲しい。善き年末年始を。。。